

# R. S. トマス初期の詩 3 篇にみるウェールズ魂

— その翻訳とともに —

永 田 喜 文

## 序にかえて

R. S. トマス (筆名 R. S. Thomas. Ronald Stuart Thomas, 1913-2000)<sup>1</sup> は、ウェールズ聖公会<sup>2</sup>に奉職する傍ら、詩人／ウェールズ愛国者として活躍した。その功績は、20 世紀最大の英語で書くウェールズ人詩人のひとりとして讃えられている。彼の現代詩人／牧師／ウェールズ愛国者としての出発点は、奇しくもほぼ一致している。

それは自伝 *Neb* に顕著である。ここでトマスは自らを三人称で語り、その誕生より聖職を退くまでをウェールズ語でつづる。しかしながらその幼少期から学業を終えるまでの間には、聖職者への熱望、愛国心、詩への言及は皆無と言ってもいい。

これらの記述が萌芽するのが、1936 年に中部ウェールズ国境地帯の村チャーク (Chirk) で副牧師に任命され、炭鉱の町ホールトン (Halton) の教会に着任した後のことだ。石炭は当時、翳りを見せ始めていたとはいえ、未だ重要なエネルギー源だった。この隆盛を誇っていた世界で、トマスはもうひとつの現実を直視する――。

初めて痛みという問題に直面するようになったのは、ここだった。(中略) 副牧師 (筆者註: トマス自身のこと。後出の「彼」もトマスを指す) はこれらの [痛みに満ちた] 人々を助けたいと熱心に思った。しかしどうやって? ものの本を読み、考えることで、彼はこれが人類があたまを使い始めて以来、人類を悩ませてきた最も大きな問題であることを、ゆっくりと理解するようになった。<sup>3</sup>

炭鉱の栄華の裏で、痛みに苦しむ人々。その多くは孤独な老人だった。その痛みは、当時の医学をもって癒されることはない。従って老人らは痛みと孤独に耐え、残りの生涯を生きねばならなかった。そのような老人らを個別に訪問し、その話にトマスは耳を傾けた。そしてトマスは、肉体の痛みが精神までも蝕んでいることを知る。その時、トマスは聖職者としての自分の使命に気づく――トマスは肉体の痛みが癒されぬ以上、彼らには魂の救済が必要だとの結論に達する。それこそが自身の聖職者としての使命であると、ここに来て初めて大望を得る。これら、いわば社会から見捨てられた人々に直に接することで、トマスは現実の社会が抱え込む諸問題のひとつに気づく。

副牧師という職は開眼のきっかけのほかに、トマスに経済的安定という恩恵をもたらした。このおかげで、好きなだけ本を購入できるようになったのだ。結果、エドワード・トマス (Edward Thomas, 1878-1917) ら英語詩人を知ることになる。そして後にはアイルランドの W. B. イエイツ (W. B. Yeats, 1865-1939) やスコットランドのフィオナ・マクラウド (Fiona Macleod, 1855-1905) の作品を通じ、アングロ・サクソンのものとは異なる、独自のケルト性を学ぶ。また神学系の雑誌や、1937 年より刊行された雑誌 *Wales*<sup>4</sup> などを講読するようになり、そこから様々な知識を蓄えていく。

英語詩に数多く触れることは、逆に、己の知識の中にウェールズ語詩がないことをトマスに気づかせた<sup>5</sup>。——ウェールズには現在、ふたつの公用語が存在する。英語とウェールズ語だ<sup>6</sup>。しかしながら16世紀以来、ウェールズ語使用者数は、時を追うごとに減少していった。1931年の時点で、ウェールズ語の使用者は全人口の36.8%のみだった。加えて1951年には28.9%と落ちる<sup>7</sup>。従って70%近くの人が当時、英語を第一言語とする英語単一言語者だった。トマスもその一人である。

ウェールズ人である以上、ウェールズ語の詩を読み、ウェールズ語の詩を書きたいと思う。だがそれは、英語が第一言語であるという事実や、英語による教育のおかげで、叶わぬ。では英語でウェールズの独自性を詠うことは、叶わぬ願いなのか。トマスはアイルランドとスコットランドの例を挙げ、次のように記す。

しかし、もし私たちが英語をその媒体として選ぶならば、本質的にウェールズ人のままでいるために、ひたむきな心を、意志の強さを持つことができるだろうか？ アイルランドはそうしてきた。スコットランドはそれを強く希求している。私たちも同じことをすべきである。<sup>8</sup>

英語は自らの意思を伝えるための「媒体」でしかない、トマスは定義する。故に英語でウェールズの独自性を詠うことは、可能であると断言する。そしてトマスは英語を「媒体」として詩を構築し、そこにケルト性をちりばめる。ちりばめることでウェールズの独自性を詠う。従ってトマスの詩は、表面上は英語詩の体裁をとりながら、そこにはウェールズの独自性が表象として詠み込まれていくことになる。

トマスのその後を決定づけたもうひとつの要素に、第二次世界大戦がある。この大戦がイギリスにもたらした破壊は、トマスを恐怖に追いやった。トマスはこの破壊を、文明発達の結果と位置づける。故に文明否定思想へ強く傾くようになる。そして同時に、トマスはイングランドとの国境地帯よりウェールズの丘を眺め、その丘にあるであろう、文明とは無縁の農村にこそ自分の理想とする世界があると夢想する。

このようにトマスの副牧師時代は、牧師になるための研鑽を積む期間であると同時に、知識の幅を拡げていった時代だった。同時にその知識の中で、自ら理想とするウェールズ像を形作っていった。

これらの思想的背景をもって着任したのが、中部ウェールズの過疎の村マナーヴォン (Manafon) であった。齢にして29歳。若く、そして、理想に燃えていた。

しかし教区内の荒れ果てた丘で、孤独な労働に勤しむ農夫らの姿は、トマスに衝撃を与えた。彼らの痩せ細った体軀と、貧困にあえぐ生活は、トマスの理想を吹き飛ばすのに十分すぎた。トマス自身、1972年のラジオ講演で「マナーヴォンは私にとって、目を見ひらかせるほどの衝撃だった。ここで私は、夢と現実の衝突に気づくようになった<sup>9</sup>」と回顧している。そして同時に、自然と密接に生きるその農夫の姿に原初的な輝きを見出す——トマスはこの困窮した寒村で、現代詩人として開眼する。トマスはこの村の様子を詩に描くことで、ウェールズの自然が持つありのままの姿と、現代ウェールズが抱える諸問題とを、独得の手法を以って提示してゆく。

この時期のトマスの詩の多くは、英国人的な見方で農夫らを描くことで幕を開ける。時にその視線は、農夫ら特有の野蛮さ／醜さを暴き、時に農夫らに罵声をも浴びせる。だがそれはあくまでも、英国というフィルターを通して眺めた様である。その英国的視点というフィルターを外せば、そこにはウェールズの独自性がある。賛美すべきウェールズ本来の姿がある。

以下に取り上げる3篇の詩は、いずれもトマスの処女詩集『原野の石』(*The Stones of the Field*) (1946) からのものである。そのいずれもが先にあげた英国的視点と、転換による価値観の逆転がよく見て取れる詩ばかりだ。トマスの詩は本国では評価が高いが、日本では翻訳で紹介されることが少なかった。そこで本稿では、トマスの詩を日本語でより幅広く知らしめる目的で、原詩の引用とともにその全訳と解説を試みた。翻訳はそのトマスの思想が読み取れるように、慎重に言葉を選んだ。

I.

A Peasant

1 Iago Prytherch his name, though, be it allowed,  
Just an ordinary man of the bald Welsh hills,  
Who pens a few sheep in a gap of cloud.  
Docking mangels chipping the green skin  
5 From the yellow bones with a half-witted grin  
Of satisfaction, or churning the crude earth  
To a stiff sea of clods that glint in the wind—  
So are his days spent, his spittled mirth  
Rarer than the sun that cracks the cheeks  
10 Of the gaunt sky perhaps once in a week.  
And then at night see him fixed in his chair  
Motionless, except when he leans to gob in the fire.  
There is something frightening in the vacancy of his mind.  
His clothes, sour with years of sweat  
15 And animal contact, shock the refined,  
But affected, sense with their stark naturalness.  
Yet this is your prototype, who, season by season  
Against siege of rain and the wind's attrition,  
Preserves his stock, an impregnable fortress  
20 Not to be stormed even in death's confusion.  
Remember him, then, for he, too, is a winner of wars,  
Enduring like a tree under the curious stars.<sup>10</sup>

ある農夫

イアーゴ・プリザーフが彼の名、まあ、言ってみれば、  
禿げあがったウェールズ丘の普通の男  
雲の隙間に僅かばかりの羊を囲っている。  
満足気だが間抜けな笑みをうかべ 飼料を短く切り  
黄色い骨から緑色の肌を切りとる かと思うと  
人の手の入っていない大地を風の中できらきらと輝く

堅い<sup>つちくれ</sup>土塊の海に向けて激しくかき回す――  
そうして彼の一日は費やされる その涎を垂らすような歓びは  
おそらく週に一度 虚ろな空の頬に  
ひびをいれる太陽より稀だ。  
それから夜に 暖炉の火に唾を吐く時を除いては この男が  
椅子に固定されたかのように動こうとしないのを見てごらんさい。  
彼の心の空虚には、何か驚くようなものがある。  
年代ものの汗を吸い込み 動物と接してきたことで酸っぱい匂いを放つその衣服は  
上品な都会の人々を驚かすが、  
それらの赤裸々な自然な感覚で感動させもする。  
しかしこれが貴方たちウェールズ人の原型なのだ この男は季節が変わる度に  
包囲攻撃のように降ってくるしつこい雨や風の摩擦から  
彼の種族や受胎可能な大地を 死の混乱の中でさえ  
嵐で掻き回されないように守っているのだ。  
この男を覚えておきなさい、それというのもこの男もまた  
不思議な星の下で一本の樹木のように堪えた戦争の勝者であるのだから。

トマスは1942年10月、副牧師から教区牧師 (rector) に昇進。牧師として一人立ちをし、中部ウェールズの丘の村マナーヴォンへと赴任する。

マナーヴォンはイングランドとの国境近くにある。現在の最寄り駅はウェルッシュプールであり、そこより少し西へと向かった丘陵地帯の谷間にある村である。だが現在でも公共の交通機関によるアクセスがない。またトマス赴任当時、村には電気も水道も通っておらず、過疎化が進んでいた。陸の孤島なのである。

赴任した年の11月、トマスは教区内のはずれの丘に住む、年老いた農夫を訪れる。その帰り道、11月の幽かな太陽の下、お世辞にも肥沃とは呼べない丘の荒野で独り黙々と農作業に励む農夫と遭遇する。その寒々しい様相と、貧困のために痩せ、しかし、連日に及ぶ肉体労働のために引き締まったその農夫の体軀に、強い衝撃を受ける。その衝撃を家に持ち帰り、書斎で思いつくままにペンを走らせた。そして生まれたのが、この詩「ある農夫」である。この詩こそが、トマスが現代詩の扉を叩いた、記念碑的作品となる。

のちにその出会いを、トマスは自らを三人称でつづった自伝 *Neb* に、次のように書いている。

ある暗く、冷たい11月の日に (中略) 彼 [トマス] は外の畑でその農夫の兄が、ビートの端を切り取っているのを見た。そのことは彼に深い印象を与え、そして農夫を訪れた後、家に帰り、自分の周りにある状況の現実に直面しようとした最初の詩、「ある農夫」 ('A Peasant') を書き始めた。<sup>11</sup>

その詩でトマスは、農夫に名をつけることから始める。イアーゴ (Iago) とは英語の James にあたる。またプリザーフ (Prytherch) は、トマスによれば中部ウェールズの農夫がいただく苗字だという。

Prytherch という苗字は、実に英語を母語とするものにとっても、発音しづらい。実際、この苗

字にはふたつの読みが存在する。ひとつは英語読みで、プリザーフ。もうひとつは、ウェールズ語読みでプラゼルックハッド<sup>12</sup>。どちらが正しい読みなのか。トマス自身、それについては言及していない。だがひとつだけ言えることは、トマスが英語話者にとってウェールズ語らしく響く名前を選んだということだ。

トマスはプリザーフを、原初の力を現代にまで受け継いだ人間として描く。その原初の力は、トマスが思い描く理想のウェールズ像の象徴である。その理想像は“true Wales” “Welsh Wales”など呼び方は様々だが、総じて「ウェールズ語を第1言語とし、農業に従事する、脱文明化した小さな地域共同体」だ。

しかしトマスはイアーゴの外面を、その原初的な美の表象とは描かない。むしろ「満足気だが間抜けな笑みをうかべ」(5-6; 以下、詩からの引用の後の数字は行数を表す)る呆けた、痩せた男として描く。またその衣服は「年代ものの汗を吸い込み 動物と接してきたことで酸っぱい匂いを放つ」(14-15)と、長年着古された、異臭を放つぼろ布として描く。その様相は、愚者そのものである。

トマスは、その初期にアイルランドの詩人 W. B. イエイツから大きな影響を受けた。彼の作品やスコットランドのフィオナ・マクラウドらの作品から、“ケルト”としてのアイデンティティを学んだ<sup>13</sup>。そのケルト・アイデンティティを自分の作品にも適用し、イングランドとは異なる“ケルトの”ウェールズを現そうと試みた。そのイエイツがケルトの英雄ク・ホリンを主人公に描いた一連の劇には、愚者たる古老が登場する。このイアーゴの愚者たる姿は、それを彷彿させなくもない。だがその愚者ですら、セリフを与えられていた。一方、この農夫は、いかにも愚者然とした「満足気だが間抜けな笑みをうかべ」(5-6)、押し黙っている。夜には、昼間の肉体労働で疲労したその体を癒すためであろうか、暖炉の前の椅子に腰かけ、動こうとしない。本を読んだり、誰かと会話を交わすこともない。ここに、私たちを感動させるようなものは何もない。むしろトマスは、私たちに感銘を与えるような要素を故意に排除し、代わりに不快に映るものを提示していくように見える。プリザーフの間抜けな微笑み、無感動に大地で働く姿や、唾を吐く様(spittled/gob) (8/12)、そして酸っぱい匂いを放つ衣服——そのいずれも心地よいものではない。ここでトマスは、ありのままの自然の姿を、ありのままに伝えようとしているのだ。つまり私たちは、前時代に活躍したロマン主義者が喜ぶような美しい牧歌的な自然の姿ではなく、醜さを強く押し出した、剥き出しの、飾らぬ自然の姿をこの詩を通じて知るのである。

そしてトマスは一步、その農夫の内面に踏み込む。そこで「彼の心の空虚には、何か驚くようなものがある」(13)と、トマスは語る。即ちこの外観に欺かれるなどと言う。外観とは、そのものが持つ一面でしかない。だがその一面のみを通じ、私たちはものの本質までも知ったような気になる。その一面を外し、内面を直視せよ、とトマスは語っているようだ。そしてその内面には、ウェールズ人の「原型」(17)がある。

どの民族にも、ステレオタイプはある。ウェールズ人のそれは、先ず「合唱好きの炭鉱夫」が浮かぶのだが、それはトマスの提示するこの農夫とは、かけ離れている。

この「合唱好きの炭鉱夫」のイメージは、近代、南部丘陵地帯を中心に作られた。18世紀から19世紀にかけて、蒸気機関の発明と開発により、イングランドで産業革命が起る。その蒸気機関を支えた熱エネルギーは、石炭であった。イングランド内の炭鉱がある程度開かれたとみたイングランド人は、その開発の矛先をウェールズに向けた。結果、南部の丘陵地帯及び、中部国境地帯周辺で、数多くの

炭鉱が開かれる。そして炭鉱を中心にいくつもの地域共同体（村）が開かれる。そこに職と輝ける未来を期待した人々が、ウェールズ内はもとより、イングランドやイタリア、アイルランドをはじめ“他国”より移り住む。このウェールズ内外からの移住者らにより、新しいウェールズの人口が形成された。こうして移住者らは故国を捨て、ウェールズ人になるのである。ここに近代ウェールズが形成される。

そしてそこに布教をしたのが、当時勢いを伸ばしつつあったメソジストであった。炭鉱夫らとその家族はメソジストを歓迎し、次々と改宗する。一方、メソジストの牧師は飲酒や娯楽を信者らに固く禁じ、その代替物として賛美歌の合唱を推奨した。この合唱を殊の外好んだのが、炭鉱夫ら武骨な男たちだった。

ここから生まれたのが、「合唱好きの炭鉱夫」というステレオタイプである。したがってこのイメージは、少なくとも18世紀以降近代から現代にかけて形作られた。

このイメージは、ウェールズ人指導者らには受け入れられなかった。ウェールズ本来の姿とは、彼ら愛国主義者にとっては、炭鉱が開発される以前の姿、すなわち、農業や漁業を中心に営まれる生活であった。故に指導者らは炭鉱の存在を唾棄した。それどころか、産業地帯の解体とウェールズ民族の自然回帰を強く訴えた。

29歳という若さにして、熱烈なウェールズ愛国主義者でもあったトマスは、彼らの思想に溺れた。したがって南部で隆盛を誇る炭鉱夫らよりも、トマスには過酷な丘での労働に代々勤しんできた彼ら農夫こそ称賛に値する。そして同時に、トラクターなど現代的な農業機器を使用せず、原始的な農作業に勤しむこの農夫こそが、ウェールズ人の原型、すなわち原初の、本来の姿を現代に伝えているとトマスは信じた。

何世紀にも亘り、その種を現代にまで伝えることは容易ではない。1年のほとんどを彩る雨、そして、丘の農地を吹きすさぶ鋭い刃のような風を耐え、この男は独り生きてきた。その雨風の激しさを、トマスは「包囲攻撃」(“siege”) (18) に相当すると表現する。ここに、中部ウェールズの丘陵地帯にある荒野たる苛酷な自然と、史上最悪の大戦である第2次世界大戦が重なる。

トマスがマナーヴォンに赴任する3年前、第2次世界大戦が勃発した。当初、トマスら夫婦が暮らしていた、やはり中部ウェールズの国境地帯にある田舎の教区では、大戦は遠い世界の出来事だった。しかし戦火が拡大するにつれ、状況は変わる。毎夜、ドイツの戦闘機がその上空を通過し、マージーサイドと呼ばれるイングランド中北部の一地域（リヴァプールなどが含まれる）に爆撃を繰り返す。その爆音を、トマスは妻とともに聴き、恐怖に怯えたという<sup>14</sup>。この恐怖から、トマスは戦争を全否定するようになる。だが英国国教会（聖公会）は、戦争全面支持の立場を表明していた。当時副牧師だったトマスは、それに異を唱える。説教にも、反戦の言葉を盛り込む。だが上司である教区牧師は、そのことでトマスを激しく叱責した。そればかりか、そのような説教をするなど厳命する。以後、トマスはそのような言動を差し控えるようになったものの、反戦の意思は固かった。

そしてそのような上司から離れ、中央での出世から背を向けるように、自ら田舎の教区を望み、赴任したトマスは、そこでこれらの縛りや恐怖から解放された。だがこの丘の荒野を襲う激しい雨風を目にした時、戦争のすさまじさが甦ってきたのだろう。その時トマスは、戦地に行かずこの荒野で苛酷な自然からの“攻撃”を生き抜いてきたイアゴと、外国の戦地や爆撃が激しい内地で生き延びた兵士・市民らも、何ら変わらないと言う。

ここでの“Remember him”(21)に注目したい。Patrick Crotty氏によれば、トマスが他の詩で使うような“Think of him”という言い回しを使っていないことから、この言い回しの使用は故意であるとする。Crotty氏によれば、これはイギリスが退役軍人や戦死者らの名誉を、国として公式に讃える際に使用する言い回しなのだ<sup>15</sup>。即ちトマスはあえて“Remember him”と書くことで、イアーゴが苛酷な自然の中、ウェールズ人の原型を守り抜いてきたのは、先の大戦での勝利者の功勳と何ら変わらぬと賛美する。

トマスはその原初の輝きを賛美する。この原初の賛美は、同時に、戦争を生み出した現代文明の否定ともなる。そしてこの原初を内包する“(ウェールズ人の)原型人間”イアーゴが、炭鉱コミュニティを中心とした現代ウェールズを、本来の姿へと戻るべく導いてくれると信じる。そのウェールズ本来の姿とは、農地で耕作に勤しみ、キリスト教を心から信奉する小さなコミュニティである。しかしそれは、容易には得られない。故にトマスは以後、生涯を通じ、ウェールズ愛国者として現代文明を否定し、原初への回帰を唱え続けた。そのウェールズ人本来の姿の規範として、原初の力を内包する特別な人間として、イアーゴは20年以上もの長きに亘り、トマスの詩に連続して登場し続ける唯一の登場人物となる。イアーゴはトマスの崇める原型人間として、観察対象として、そして時にトマスの会話の相手として、詩に姿を現す。この詩はその長い遍歴の幕開けにすぎない。

## II.

### Man and Tree

- 1 Study this man ; he is older than the tree  
That lays its gnarled hand on his meagre shoulder,  
And even as wrinkled, for the bladed wind  
Ploughs up the surface, as the blood runs colder.
- 5 Look at his eyes, that are colourless as rain,  
Yet hard and clear, knotted by years of pain.
- Look at this locks, that the chill wind has left  
With scant reluctance for the sun to bleach.  
Notice his mouth and the dry, bird-like tongue,
- 10 That flutters and fails at the cracked door of his lips.  
Dumb now and sapless? Yet this man can teach,  
Even as an oak tree when its leaves are shed,  
More in old silence than in youthful song.<sup>16</sup>

### 男と樹

この男をしらみつぶしに見てみよ。彼はその痩せ衰えた肩に  
ふしくれだった枝の手を置くその樹よりも年老いており  
そればかりか 刃やいばのような風がその表面を掘り起こすので、年輪のごとき皺が刻まれ  
より冷たく 血潮はその体を駆け巡る。  
彼の眼を見よ その眼は雨のように無色だが

きつい色をし 澄んでおり、痛みに満ちた何年にもわたる年月という糸で もつれるように編まれている。

この房のような巻き毛を見てみよ この髪は凍えるほど冷たい風が  
やや不承不承に、太陽が漂白してしまうようにと残しておいたのだ。

その口と ひび割れた扉のようなその唇の所でちろちろ動きまわり 衰弱している  
鳥のような乾いた舌をじっくりと観よ。

今黙りを決め込み、そして萎びているのか？ しかしこの男は教えることができるのだ、  
落葉するオークの樹のように

若者の歌よりも 年寄の入った沈黙にある 更に多くのことを。

R. S. トマスは非常に規則正しい生活を送る男だった。たとえば彼は食事の時間をきっちりと定めた。決してそれより遅れることも、早まることもなかった。朝食は8時、パンとチーズの軽食を11時、昼食は1時で5時にお茶を飲み、8時に夕食をとる。このルーチンは乱されることはなかった。息子であるガイディオンは、父の死後、「毎日、それが確実に行われました。エルジー (Mildred Elsie Eldridge, 1909-1991, 筆者註: トマスの最初の妻の名前) はまるでロボットのように、父に食事を出したんです。父は決して早く [食卓に] 来ることもなければ、遅れることもありませんでした。また料理もしなかったのです」<sup>17</sup> と思ひ返す。そしてトマスは、教会での礼拝などがない日には、午前中は書斎での勉強と読書の時間に充てた。午後は牧師館の庭の草刈りをする。そして夕べには教区民——その多くは年寄りたち——の家々を訪ね歩き、その話に耳を傾けた。その往復時に目にする、中部ウェールズの丘陵地帯における農夫らの生活は、トマスの興味の対象以上となった。むしろその様は不可解であり、衝撃だった。その衝撃ゆえに、自分の中で現代詩が形づいたとまで、後にエッセイに記している<sup>18</sup>。そしてトマスはその不可解な農夫らを理解しようと、“観察”を始める。そこから、その初期の詩の多くが生まれることになる。——トマスは午後の散策も兼ねた農家訪問後、家に帰ると書斎にこもり、ほぼ即興に近い形でその道すがら目にした光景から得た“感動”や“驚愕”を詩に詠み込んでいった。その原稿は多くの場合、机の傍らに備えつけられたごみ箱にくしゃくしゃに丸められ、捨てられた。それを翌朝、ごみ箱から探し出し、紙の皺を伸ばし、保管したのは他ならぬ彼の妻エルジーであった。この詩も、そのような過程から生き延びた詩のひとつであろう。そして後にトマスの処女詩集『原野の石』(*The Stones of the Field*)で、日の目を見るのである。

トマスの初期、所謂マナーヴォン時代<sup>19</sup>の特徴が、この詩「男と樹」には多く込められている。そのひとつが先に指摘したように、“観察”からこの詩が生まれていることだ。トマスは不用意に、その観察対象である農夫らの心のうちに踏み込まない。むしろ農地と外界を隔てる垣根——中部ウェールズの農地の多くは、大人の男性の背丈かそれより首一つ分ほど高い、柵などの樹から作られた垣根で囲われている——の外に立ち、遠くから独り労働に勤しむ農夫らの姿を、見たままに、そして赤裸々に描く。この詩の冒頭にある“study”という動詞は、それを物語っている。この冒頭は3語から成る短い句だが、それ故に力強い印象を与える。特にその後長めの詩句が展開することを考慮すれば、この短い3語が良いアクセントになっていると見ることができよう。また同時に、命令形ゆえに、ある種の力強さも感じるができる。

そしてこの命令は、読者のみならず、己にも向けた言葉であると思われる。初期のトマスの詩は教区の農夫らの観察から生まれたことは既に述べたが、トマスは観察という行為を一過性のものとはし



なかった。繰り返し、何度も何度も観ることで、普通には気づかぬ<何か>を見抜こうとする。実際にこの詩の中だけでも冒頭の“Study this man”に始まり、“Look at his eyes” (5)、“Look at this locks” (7)、“Notice his mouth …” (9)と3回“見／観よ”という力強い呼びかけが響く。またこの詩に限らず、その初期には“see”“look”“consider”のように、観察にまつわる言葉で幕を開ける詩が多くある。そのたびに詩人は観察対象の傍らに佇み、その対象の様子をじっと見詰めよ、と、読者そして己に強いる。そしてそこから一回限りの観察では見失ってしまうような、細かいが大切なものを見出そうとする。

実際、この詩で観察対象になる農夫は普通の男だ。それでいてトマスは、非凡な姿をそこに見出す。この非凡さのおかげで、中部ウェールズの農夫らは他の、たとえばイングランドの農夫や、ウェールズ南部丘陵地帯の炭鉱夫らとは異なった特別の存在であることを暗に語るのである。

トマスは中部ウェールズの丘陵地帯の農地——一説によれば、標高650フィートもの高さであったという<sup>20</sup>——で孤独に働く男の姿を「しらみつぶしに見てみよ」と言う。そしてじっくりと観察することで、トマスはこの農夫は日々の労働から一切の贅肉がない、引き締まった体軀をし、その姿はまるで1本の木のようにだと語る。“gnarled” (2)「ふしくれだった」という言葉は、樹の枝を表現するのに使われているが、この言葉には同時に人間の手や腕の「ふし」「こぶ」の意味も持つ。実際に別の詩‘The Labourer’ (An Acre of Land (1952))では、“Notice the twitching hands,/Veined like a leaf, and tough bark of the limbs,Wrinkled and gnarled” (下線筆者)と、農夫の手を形容するのに使われている。

また“wrinkled” (3)という言葉も、象徴的である(この言葉は前出の‘The Labourer’でも使用されている)。名詞の“wrinkle”(「皺」「ひだ」の意味)から生まれた動詞で、ここでは過去分詞として形容詞的に使われているが、文章の丁度中央の位置に挿入句的に置かれていることから、この言葉は人と樹の両方を修飾するように、あいまいに配置されているととれる。したがって「刃<sup>やいば</sup>のような風」(3)に日がな一日曝され、その風はまるで大地に鋤を入れるようにこの男の体に「皺」を刻みつけていく。彼の男の体に長い年月をかけて刻まれたその皺は、同様に風に曝される樹の内側に刻まれる「ひだ」という年輪を象徴する。そしてその「血潮」は、樹液の暗示だろうか、その吹きすさぶ風より「より冷たく」(4)農夫の体内を駆け巡る。

次に瞳の描写を見る。「雨のように無色」(5)と形容されるその瞳は、しかしながら、澄んでいるのではない。一般的に春の雨といえば長い冬を溶かす、希望の象徴である。だが降雨量の多いイギリスの中でも、特に雨が多いと言われるウェールズでは、イメージが異なる。即ち雨と、一年のほとんどに亘り空を覆う灰色の雨雲は、陰鬱さや絶望の象徴となる。若き頃は、この空の下でも希望を抱いたことだろう。しかし年月を経て、経験を積むと、ウェールズでは人はこの陰鬱さから一生逃れ得ぬ事を学ぶ。そして希望は打ち捨てられる。後には諦めの感情が残るのみ。この希望でも、絶望でもない、その中間に位置するニュートラルな「諦めの感情」の色こそが、「無色」なのだ。故に少し見ただけでは雨のように澄んだその瞳も、よく観察してみれば「痛み<sup>やいば</sup>に満ちた年月」から紡がれた1本の糸が、何重にももつれ、結ばれ、絡まり(“knotted”) (6)、ひとつの塊となってできていることが知られる。この“knotted”という言葉は、そのような情景をたった一言で描写できるほどの意味を持っている。この塊となったもつれた1本の糸を、時間をかけて解きほぐしていけば、この男の苦痛に満ちた人生が明らかになる。だがトマスは、あえてそうしない。ただ観察者としてそこに立ち、あ

る種冷徹に、その様だけを描写する。そうすることで感傷に陥る危険は避けられ、現代詩らしい苛酷さがこの詩に成功裏に詠み込まれる。

同時に“knot”には「(植物などの)こぶ」という意味もあり、ここからもトマスがこの農夫を樹になぞらえて描いていることが知られる。

男は高齢なのだろう。“this locks, that the chill wind has left/With scant reluctance for the sun to bleach” (7-8) からは、白髪であることが窺える。また“chill wind” (通常ならば“chilly wind”だろう) とはいかにも文語的な表現だが、“chill”には「(凍えるほど)冷たい」という意味と同時に、「(人の態度や感情が)冷淡な」という意味もある。「やや不承不承に」(“With scant reluctance”)という形容からも、この風を擬人化してとらえた場合には、両方の意味にとることが可能であろう。同時にこの言葉は、農夫が長年曝されてきた風が、先の“bladed”との相乗効果もあり、我々の想像を絶する過酷なものであったと伝える役割も果たす。このような表現からも、中部ウェールズの丘で働く農夫の環境が田園的なものではなく、苛酷な環境であることが知られよう。

最後にトマスは、この農夫の口に注目せよと言う。この寡黙な男のまるで「鳥のような」舌は、しかしながら干乾び、そして、「ひび割れた扉のようなその唇の所で」鳥の舌が忙しく動き回るように、「ちろちろ動きまわり」ながらも「衰弱している」(9-10)。つまりトマスは、この男の寡黙さは性格から来るのではないと言う。むしろ舌は口腔内を常に動きまわり、何とか言葉を形作ろうとしている。しかしひび割れた唇は重く、従って言葉を発するために開くことがない。その時、トマスはこの男が「愚かな」故に「黙りを決め込」(11) (“dumb”には「口がきけない」の他に「鈍い」「愚かな」という差別的な意味もある)むのか、それとも、その舌は樹液／体液が枯れ「萎びているのか？」(“sapless”) (11)と問う。

男は呆けて言葉を出さないのではない。この地では「凍えるほど」(7)の寒さで「刃<sup>やいば</sup>のような」(3)風が、常に吹き荒れる。そして鍬の刃が大地を耕すように、その風は男の体を傷つけ、えぐってきた。その痛みに、若いころは悲鳴を上げたことだろう。だが悲鳴を上げることは、体力を奪うことにしかならない。故に悲鳴をかみ殺し、耐えてきた。そして長年耐えるうちに、いつしか男は寡黙になった。男はこの苛酷な大地での労働には無駄なおしゃべりは不要と、その自然と密接なる生活を通じて学んだのだ。故にその沈黙の裏には、大地の則とも呼べる知恵がある。それを知った時トマスは、「落葉するオークの樹のように／若者の歌よりも 年寄の入った沈黙にある 更に多くのことを」(12-13)この男は教えることができる、と断言する。その男の姿は詩の冒頭で語られる貧弱な姿ではなく、知恵の象徴でもある「オークの木」に準えて描かれる。

沈黙が多くを語るとは、まさにパラドックスだ。だが我々は常に言葉から学ぶわけではない。一切の言葉を発することのない“自然”から、学ぶことは多い。実にトマスは中期から後期にかけ、自らの宗教観をパラドックスを以って語るが、この詩「男と樹」は、その手法が極めて初期の段階で既に萌芽していたことの証ともなっている。

### III.

#### A Priest to His People

- 1 Men of the hills, wantoners, men of Wales,  
With your sheep and your pigs and your ponies, your sweaty females,

How I have hated you for your irreverence, your scorn even  
Of the refinements of art and the mysteries of the Church,  
5 I whose invective would spurt like a flame of fire  
To be quenched always in the coldness of your stare.  
Men of bone, wrenched from the bitter moorland,  
Who have not yet shaken the moss from your savage skulls,  
Or prayed the peat from your eyes,  
10 Did you detect like an ewe or an ailing wether,  
Driven into the undergrowth by the nagging flies,  
My true heart wandering in a wood of lies?

You are curt and graceless, yet your sudden laughter  
Is sharp and bright as a whipped pool,  
15 When the wind strikes or the clouds are flying;  
And all the devices of church and school  
Have failed to cripple your unhallowed movements,  
Or put a halter on your wild soul.  
You are lean and spare, yet your strength is a mockery  
20 Of the pale words in the black Book,  
And why should you come like sparrows for prayer crumbs,  
Whose hands can dabble in the world's blood?

I have taxed your ignorance of rhyme and sonnet,  
Your want of deference to the painter's skill,  
25 But I know, as I listen, that your speech has in it  
The source of all poetry, clear as a rill  
Bubbling from your lips; and what brushwork could equal  
The artistry of your dwelling on the bare hill?  
You will forgive, then, my initial hatred,  
30 My first intolerance of your uncouth ways,  
You who are indifferent to all that I can offer,  
Caring not whether I blame or praise.  
With your pigs and your sheep and your sons  
and holly-cheeked daughters  
35 You will still continue to unwind your days  
In crude tapestry under the jealous heavens  
To affront, bewilder, yet compel my gaze.<sup>21</sup>

## 民のための司祭

丘の男らよ、淫らな者たちよ、ウェールズの男たちよ、  
家畜の羊に豚、ポニーに、汗まみれの女どもといる者たちよ、  
お前たちの不遜な言動や、芸術の洗練や『教会』の神秘でさえ  
お前たちが見下したことで 如何に私がお前たちに嫌悪を感じてきたことか。  
お前たちを罵るわが言葉は よく炎の柱のように噴出しては  
いつもお前たちのじっと見る視線の冷たさに消されたものだ。  
辛辣な荒野から ぎゅっと捻りとられるように絞り出されてきた骨で出来た男らよ、  
未だその野蛮な頭骸骨から苔を振り落としていなければ  
その瞳から泥灰を祈りによって降り払ってもいない者たちよ、  
つきまとって離れない蠅によって藪の中へと追いやられ  
嘘でできた林の中を雌羊や去勢された羊のように  
彷徨い歩く私の本当の心を お前たちは見抜いたのか？

お前たちはぶっきらぼうで野卑、だがお前たちの突然響く笑い声は  
まるで風が殴りつけるように激しく吹き 雲が飛び退る時の  
鞭打ちされた水溜まりのように鋭く、そして、輝かしい。  
そして教会と学校といった装置は  
お前たちの神聖化されていない行動を無力化できもせず  
お前たちの野性の魂に端綱をかけそこなってきた。  
お前たちは贅肉がなく 引き締まり 瘦せぎすだが、その力は  
黒表紙の聖書にある青ざめた言葉を嘲笑う。  
そしてその手を世界の血液の中で濯ぐことの出来るお前たちが、  
なぜ聖餐のパン屑を求める雀のようにやってこなければならぬのだ？

私は 詩やソネットに対するお前たちの無視を  
絵描きの技巧への尊敬の念をお前たちが払わないことを 責めてきたが  
私が耳を傾けたその刹那、お前たちの話し言葉が  
細流のように澄み、その唇から泡のように溢れ出る  
あらゆる詩の源をその内にもっていることがわかったのだ。  
そしてどんな筆さばきも丸裸の丘の上に建つお前たちの住まいが持つ  
芸術性に匹敵することは出来ないのだ。  
そういうわけなので、私が当初感じた嫌悪感や  
私がお前たちのぎこちないやり方に堪えられなかったことを  
私が差し出さうあらゆるものに無関心で、  
誉めようが非難しようが気にも留めないお前たちに許してほしい。  
豚や羊、息子らや ヒイラギの葉のように紅葉した頬の娘らと共に  
お前たちは天然のつづれ織りに包まれ 嫉妬深い天の下で  
今までどおり日々を紐解き続けることだろう  
そして私が凝視するのを侮辱し、まごつかせ、しかし凝視させ続けることだろう。

この詩「民のための司祭」は、それが納められた処女詩集『原野の石』(*The Stones of the Field*)では、二番目に長い詩だ(同詩集内では、最後に配された物語詩‘The Airy Tomb’が最も長い)。実際、この詩は全37行と、トマスの詩の中では長い部類に属する。

これまでトマスは、‘Man and Tree’で触れたように、観察者に徹してきた。そして観察対象である農夫らに接することはなかった。実生活ではトマスは、農夫らの家をよく訪問し、特に老人の話には耳を傾けた。だが詩の世界では、むしろ観察対象とは距離を置いた。そして離れたところから、対象をくまなく眺めた。トマスはそのようにして、農夫らを観察してきた。観察しては、その詳細を詩に描いてきた。詩の中で語りかけられるのは、読者であり、農夫ら観察対象者らではなかった。まるで観察対象との直接接合を、自らに禁じているかのようであった。

しかしここにきて、その禁は破られる。トマスは冒頭より、農夫らに声をかける。しかしその声は、優しく語りかけるものではない。「丘の男らよ、淫らな者たちよ、ウェールズの男たちよ」と、強い。むしろ“wantoners”(1) (「非人道的な」「ふしだらな」「抑制のできない」を意味する形容詞“wanton”から派生した名詞)という言葉からは、罵倒するような姿勢すら感じられる。

この農夫らとともにいるのは、「羊」や「豚」といった家畜と、そして日々労働に勤しむ農家の「汗まみれの女」だ。この“sweaty females”(2)には、特に詩を読むような教養の高い読者は、驚きを隠しえないだろう。普段、彼ら／彼女らが接する“ladies”とは異なる。そこには特にアッパーミドル以上の女性特有の上品さや、洗練されたしぐさを連想させるものはない。彼女らは日々、農地で土や泥にまみれ、家畜らの世話に明け暮れる。その流れる汗をぬぐおうともしない「汗まみれの女ども」。彼女らを表す言葉としてトマスが選んだのは、ladiesでもwomenでもない。動物の「雌」をも意味する“females”だ。

この衝撃的な冒頭に関し、Anne Stevenson氏は「“嫌った”とは強い言葉である。“汗まみれの女ども”とは衝撃的である。(中略) [しかし] 嫌悪、反感、傲慢など、これらキリスト教とは真逆の位置にある感情が、[話者トマスの] 自己防衛のための暴言として吐き出されている。己が好む「洗練さ」を守りながら、詩の話者は「自らが彼ら農夫と同郷出身であるという」己の出自を完全に無視している」と分析する<sup>22</sup>。即ちこれら——そしてこの後に控える——農夫らに向けられた、激しいまでの叱責／罵詈雑言は、トマス自身の自己防衛手段である。

ではそれほどまでにして隠したい出自とは何なのか。トマスはウェールズ出身である。だがそれを隠したいのではないだろう。むしろトマスは、ウェールズ愛国者であることを公言している。

またその経歴も恥ずべきものではない。北ウェールズのバンゴール大学で古典を学び、その後、南部のスランダフ神学校で聖職者になるべく、トマスは学んだ。高等教育で学び、牧師となった。きちんとした経歴である。階級制度がまだあったイギリスならば、少なくとも中産階級であろう。隠す必要などない。

しかしその家は貧しかった。——父親はもともと、いずれは船長になることを囑望された船員だった。しかし体を壊し、船を降りざるをえなくなる。そして破れた網の補修など浜での簡単な仕事で、何とか家族を養うこととなり、労働者階級かそれ以下に転落したのである。ロナルド(R. S. トマス)は、その第一子である。即ち、農夫らと同郷であり、彼ら農夫と同じ労働者階級の出身なのだ。

そして牧師となり、農夫らより上の階層になった今、教養のない彼らの下卑た行為は許しがたい。むしろ彼らの不道德な行為には、嫌悪すら感ずる。故に同郷で同じ階層の出身であることを隠したいがために、または否定したいがために、これほどまでの罵倒を繰り返すのだという。ここには同族に対する、ある種独特な憎悪すらあるのかもしれない<sup>23</sup>。

故にこの呼びかけに続いてあらわれるのは、「炎の柱」(5) たる激しい叱責だ。牧師らしく優しく諭す言葉はない。それまでの不満や鬱積した感情が、まさに地獄を焦がす劫火のような「炎の柱」となり、噴出する。3行目にある“hate(d)”という言葉は、日本語の「嫌う」とはニュアンスが異なる。嫌悪や憎悪に相当する、激しい感情を表す言葉である。

この原因を、それでもトマスは個人的な恨みではないと言う。「お前たちの不遜な言動や、芸術の洗練や『教会』の神秘でさえ／お前たちが見下したことで 如何に私がお前たちに嫌悪を感じてきたことか」(3-4) と、トマスは農夫らの美への意識のなさや不道德さが原因だと語る。即ちその怒りの原因は、芸術がもたらす至高の美や、キリスト教的道徳観に農夫らがそむいたばかりか、無視し、あまつさえ「見下し」ながら姦淫にふけたことにある。芸術が醸し出す至高の美を通じ、神の領域に触れることができると信じるトマスにとって、それは許しがたい行為だったのだろう<sup>24</sup>。そして農夫らの様を「野蛮」と蔑み、「ぶっきらぼうで野卑」(“curt and graceless”) (13) と罵倒する言葉は続く。この“graceless”を「野卑」と訳したが、この言葉には「神の恩恵」(“grace”)を「失った」(“-less”), すなわち、「神に見放された」「墮落した」(古語) という意味もある。そのような強い言葉をトマスは投げつける。

しかしこのような激しい言葉の炎も、「お前たちのじっと見る視線の冷たさ」の前では、「いつも」(6) 消されてきた。そればかりかトマスは、農夫らが教会の礼拝を欠席する理由としてあげる数々の嘘に翻弄される。11行目にある「嘘でできた林の中を(中略)彷徨い歩く」とは、そのような自分の姿を比喩的に描いたものだ。この詩より数年後にトマスが書いたラジオ劇『牧師』(*The Minister* (1953)) では、同じように田舎に赴任したメソジストの若き牧師のセリフとして、次のようなものがある——「彼らが言うには、時期がまずかったということです。子羊たちは生れるし、／乾草を切り、泥炭を運ばなければならない。／そういうことは冬の方がいいのだ、と」(“It was the wrong time, they said, there were the lambs,/And hay to be cut and peat to carry./Winter was the time for that.”)<sup>25</sup>。農夫らはこのように嘘の口実ばかりを並べ、牧師を煙に巻く。経験を積んだ牧師なら、うまく対処できる。だが経験も浅い若き牧師には、それはできない。むしろその嘘に翻弄され、その嘘と嘘の間を「彷徨い歩く」(12) のみ。

ここに田舎の教区が抱える、一つの問題が浮かび上がる。本来、牧師は信者ら教区民を精神的に導く指導者である。しかし農夫ら肉体労働者には、それは念頭がない。牧師の諭しや聖書の言葉は、彼らに黙殺される。牧師はそれを彼らが精神を病んでいる故と思う。魂の救済が必要だと考える。しかし農夫らは、それを頑なに拒む。そのため救済は全く行われず、農夫らの間には不道德な思想や言動がはびこる。だが牧師はそれをどうすることもできない——これが田舎の、特に若き牧師が抱え込む問題である。

この詩は、ここで終われば、若き牧師による苦悩の告白ということになるだろう。だがトマスは違う。彼ら農夫らの行動や言動を、イングランド政府が決め、ウェールズに押し付けてきた「教会と学校といった装置」(16) という色眼鏡を外してみよという。自分も彼らも、同じウェールズ人ではな

いか。その時トマスは、ウェールズには独自の文化があり、故に独自の価値があることに気づく。故にウェールズ人はイングランド人の尺度では測ることはできない、と宣言する。ここで価値観の変化／逆転が起こる。

トマスはこれまで敵国イングランドの言葉である英語で書かれた「詩やソネットに対する」農夫ら「の無視を」、また、農夫らが「絵描きの技巧への尊敬の念を（中略）払わないことを 責めてきた」（23-24）と認め、その一方で、農夫らの話し言葉にきちんと耳を傾けてみれば、彼らの言葉は「細流のように澄み、その唇から泡のように溢れ出る／あらゆる詩の源をその内にもっていることがわかったのだ。」（25-27）と告白する。即ち自分のこれまでの彼らに対する決めつけは全て不当なものであると告解する。

トマスは聖公会＜英国国教会＞の牧師として、その英国的な尺度でのみ農夫らを量ってきた。だがそれは、ウェールズでは大変な誤りだと断言する。

価値観の逆転は、一つの尺度の崩壊となる。尺度が異なる世界／文化に属するものを、一方の尺度でのみ量ることの愚かさを口にする。そしてどちらかに優劣をつけるのではなく、素晴らしいものは素晴らしいと認める寛容さこそが大切だと言う（「どんな筆さばきも丸裸の丘の上に建つお前たちの住まいが持つ／芸術性に匹敵することは出来ないのだ」（27-28））。

その時、牧師であるトマスは、農夫ら肉体労働者に許しを請う。「私が当初感じた嫌悪感や／私がお前たちのごこちないやり方に堪えられなかったことを（中略）／お前たちに許してほしい。」（29-30）と、冒頭の激しさとは打って変わった優しい言葉で、農夫らに語りかける。——ここで価値観の逆転とともに、導く者と導かれる者という立場の逆転も生じる。即ちこの時、導く側である牧師は、導かれる側である教区民（＝信者）の農夫から自分には足りぬ、ウェールズ本来の美や力強さを学ぼうとする。だがトマスは農夫らに直接教えを乞おうとはしない。これまで通り、一步離れた所に立ち、彼らの様子を「凝視」することで学ぼうとする。

「観察」という行為は変わらない。しかし、トマス自身の心構えが異なる——今トマスは土にまみれ働く男たちから、その自然と密接な暮らしからのみ得られる自然の神秘や、原初的な力を学ぼうとする。この詩「民のための司祭」は、そのような牧師の信教の告白と言っていいだろう。

## 終わりに

以上、ここまで見てきたように、トマスの詩は、表面上は英語詩の宿命だろうか、英国的な見解が占める。しかしその裏には、祖国ウェールズに対する深い愛国心や、ウェールズ魂が潜む。そのウェールズ魂は英国的都市文明社会とは遠く離れた、自然の只中にある。言い換えればウェールズらしさというものは、ウェールズの大地と密接して生きる姿にある。

そのウェールズ魂を言葉で表現するには、トマス自身も触れているように、独自言語であるウェールズ語が最適であろう。しかし英語で考え、書かねばならぬ宿命から、トマスは英語を媒体とし、そこにウェールズらしさをちりばめることで英語詩を編む。故に特にトマスの初期の詩では、次のような構造を持つものが多い。即ち英国的視点から詩は幕を開け、先に進むに従ってちりばめられたウェールズらしさが集約され、転機が訪れる。そしてそこに至りて初めて価値観が逆転し、ウェールズの優勢が謳われる。ここで訳出した3篇の詩には、特にその構造がよく表れていると思う。

## 註

1. 詩人。1913年3月29日、ウェールズはカーディフに生まれ、5歳より北ウェールズのホーリーヘッドで育つ。バンゴール大学、スランダフ神学校で学んだ後、1936年に聖公会の副牧師になる。1942年に教区牧師に昇進。この時、同時に現代詩人として開眼し、処女詩集 *The Stones of the Field* 出版以来、その生涯に25冊以上の詩集を出版する。1955年のHeinemann賞や1964年のQueen's Gold Medal for Poetryなどをはじめ、数多くの文学賞を受賞。1996年にはノーベル文学賞にノミネートされている。
2. Church in Wales. Church of England (英国国教会もしくは聖公会) から1920年3月31日に独立し、設立された。
3. ウェールズ語の 'neb' は英語の 'no one' もしくは 'nobody' に相当する。この自伝 *Neb* を含むウェールズ語のエッセイ3点がJanson Walford Daviesによって英語に翻訳されており、*Autobiographies* の書名の下に1冊の本として出版されている。研究者の間ではこの翻訳を使用するのが通例となっており、本稿でもそれに倣う。R. S. Thomas, 'No One', *Autobiographies*, translated from the Welsh by Janson Walford Davies, (J. M. Dent, 1997), p. 43. 以下、本稿における引用の邦訳は全て筆者による。
4. Keidrych Rhys が編集長を務め、1937-1949年および1958-1960年に刊行された定期刊行物。ウェールズに伝わる伝説／伝承、歴史、ウェールズ語の言い回しや先人の言葉などをウェールズ語と英語で紹介した。トマスはこの雑誌に多大なる啓発を受けたことを、自伝 *Neb* に記している。( *Autobiographies*, p. 53-54)
5. cf., *Autobiographies*, p. 42-43
6. ウェールズは1536年の統合法以来、イングランドの勢力下に完全に入る。同時に、ウェールズ語の公式の場での使用が禁じられた。それから400年以上の時を経て、1967年と1993年にウェールズ語法案がイギリス議会を通過するまでの間、ウェールズでは公式言語は英語のみだった。
7. *Report on 1951 Census* (Welsh Language Board, 1955), p. 8に基づく。イギリスでは10年に1回国勢調査が行われ、その際に各自治体に独自の質問をすることが許されている。ウェールズでは3歳児以上を対象に、ウェールズ語の使用に関する調査を行っている。なお1941年は第二次世界大戦の影響により、国勢調査は行われていない。またウェールズ語使用者のほとんどは英語とのバイリンガルであり、ウェールズ語単一言語者は非常に少ない。実際に1951年の時点では、ウェールズ語単一言語者は約1.6%である。
8. R. S. Thomas, "Some Contemporary Scottish Writing", *Selected Prose*, edited by Sandra Anstey, (seren, 1995), p. 33
9. R. S. Thomas, "The Paths Gone By", *Selected Prose*, p. 107
10. *The Stones of the Field* は自費出版だったこともあり、後に第2詩集 *An Acre of Land* (1952)、ラジオ劇 *The Minister* そして新たに書かれた詩と合わせて、*Song at the Year's Turning* としてRupert Hart-Davis社より1955年に再出版された。本稿では *Song at the Year's Turning* (1955) に収録されたものを決定稿とし、そこから翻訳をおこなった。R. S. Thomas, *Song at the Year's Turning*, (Rupert Hart-Davis: London, 1955), p. 21
11. *Autobiographies*, p. 52
12. ウェールズ語のスペリングでは、Prydderch となる。ウェールズ語には th の表記はない。代わりに英語の濁ったほうの th 音 [ð] を表す場合、dd のダブル・アルファベットで表す。なお本稿では、便宜上、ブリザーフと英語読みで表記する。
13. この他、トマスのケルト性 (=ウェールズらしさ, Welshness) を決定した重大なものに、ウェールズ人指導者であるサンダース・ルイス (Saunders Lewis) の思想や、トマスの最初の妻で画家のエルジー (Elsie) が参加した王立水彩画協会による、「ブリテン島の変わり行く様相を記録する」 ('Record the Changing Face of Britain') 「国の」プロジェクト *Recording Britain* などが存在する。このプロジェクトのウェールズ編で、彼の妻エルジーが中部ウェールズの丘で泥炭を掘り出す農夫の様子を描いた1枚の絵 "Peat Cutting" が、トマスがブリザーフ像を象っていく際に大きな影響を与えたと思われる。これに関して詳し



- くは、M. Wynn Thomas氏が、“For Wales, See Landscape: Early R. S. Thomas and the English Topographical Tradition” (edited by Tony Brown, *Welsh Writing in English: A Yearbook of Critical Essays*, vol 10, (Gomer, 2005)) で詳細に亘り論じている。また先に挙げたサンダース・ルイスとの関係は数多くの批評家が論じているが、中でもGrahame Davies, “Resident Aliens: R. S. Thomas and the Anti-Modern Movement” (edited by Tony Brown, *Welsh Writing in English: A Yearbook of Critical Essays*, vol 7, (Gomer, 2001-2002)) に詳しい。
14. cf., *Autobiographies*, p. 49
  15. Patrick Crotty, ‘The Iago Prytherch Poems’, *Echoes to the Amen: Essays After R. S. Thomas*, edited by Damian Walford Davies, (University of Wales Press, Cardiff, 2003), p. 23
  16. ‘Man and Tree’ は *Song at the Year’s Turning* では省かれているため、全集に収録されたものから翻訳をおこなった。R. S. Thomas, *Collected Poems 1945-1990*, (J. M. Dent: London, 1993), p. 7
  17. Byron Rogers, *The Man into the West—The Life of R. S. Thomas*, (Aurum, 2006), p. 140
  18. cf., From a tape of R. S. Thomas reading and discussing his own poems, (‘Norwich Tapes Ltd; The Critical Forum’, 1978)
  19. トマスの詩作に環境が大きく作用したことは、Brian Morrisが ‘The Topography of R. S. Thomas’ で指摘しているように、明らかである (*Critical Writing on R. S. Thomas*, edited by Sandra Anstey, (Seren, 1992), p. 112)。そのためトマスの詩人としての経歴は、その作品がトマスの赴任地と密接な関係があるために、しばしばその土地の名を冠して区別される。具体的には初期のマナーヴォン時代 (Manafon) (1942-1954), 中期エグルウィス・ヴァク時代 (Eglwys-fach) (1954-1967), 後期アバーダロンおよび以降 (Aberdaron and after) (1967-2000) に分けられる。
  20. *The Man into the West*, p. 133
  21. R. S. Thomas, *Song at the Year’s Turning*, (Rupert Hart-Davis: London, 1955), p. 29
  22. Anne Stevenson, ‘The Use of Prytherch’, *The Page’s Drift: R. S. Thomas at Eighty*, edited by M. Wynn Thomas, (Seren, 1993), p. 47
  23. これよりかなり後になるが、中期にはトマスは同族であるウェールズ人にはっきりとした憎悪を表現している。それは敵国イングランド人に対する憎悪と同等か、それ以上のものとなる。たとえば「あの他者ら」(‘Those Others’) (*Tares* (1961), p. 31) と題されたその詩では、「(同族であるウェールズ人に対する) 憎しみは育つのに長い時間がかかる、そして私の憎悪は生まれ落ちし時より増し続けて来た」(“Hate takes a long time/To grow in, and mine/Has increased from birth”) とその感情を吐露する。同詩集 *Tares* に収録された「ウェールズ版新約聖書」(‘Welsh Testament’) (p. 39) では、同様の感情を更に激しく吐露するが、その一方で巻頭詩の「暗き井戸」(‘The Dark Well’) ではイアーゴ・プリザーフ(「ある農夫」(‘A Peasant’) 参照) が抱え込むウェールズの負の歴史を深い哀惜を以て語るなど、その感情は非常に複雑なものであることが知られる。
  24. トマスは詩など創造物を通じ、人は神の領域に近づくことができ、原初的なイメージを内包する詩こそが神に達することのできる最も近道であると、その自らが編んだ宗教詩アンソロジー *The Penguin Book of Religious Verse* の序文で語っている (*The Penguin Book of Religious Verse*, edited by R. S. Thomas with the editor’s introduction, (Penguin Books, 1963), p. 8)
  25. R. S. Thomas, ‘The Minister’, *Song at the Year’s Turning*, (Rupert Hart-Davis: London, 1955), p. 85

(ながた よしふみ 総合教育センター)